

理央や唯奈を僕のものにしてから少し経った、ある日の朝のこと。

僕は、いそいそと学校へ向かう準備をしていた。

優華が作っておいてくれた朝食を食べ、彼女がアイロンをかけておいてくれた服を着て、身支度を整える。

ちなみに、その優華はというと、もう既に学校へ向かって出かけた後だ。

一緒に行きたいというか、車で送ってもらいたいのは山々だが、教師と生徒がそんなことをしているところを見咎められれば面倒なことになるに決まっているのだから、まあ仕方がない。

ちょっとくらい歩いたほうが、健康にいいともいうし。

「……ん？」

家に鍵をかけて、さあ出発しようとしていたところで。

ふと、近所の家の玄関先の様子が目に入った。

「いってらっしゃい、康史さん。気を付けてね」

「うん、行ってきます」

朗らかに挨拶を交わした後、女性が男性に「いってらっしゃい」のキスをする。

どうやら、仲睦まじい若夫婦らしい。

二人の会話を聞く限り、奥さんの方は専業主婦のようだ。

そういえば、引っ越して優華と暮らすようになってからしばらく経つが、近所の普通の家に住んでいる人たちのことは、これまであまりよく知らなかった。

「……いいねえ」

そう呟いて、僕はにやけながら目を細めた。

どちらも美男美女だったが、もちろん僕の関心が向いたのは女性のほう。

年の頃は、優華といくつも変わらないくらいだろうか。

顔かたちは上品に整っていて、くせのない黒髪は、後ろにまとめられてつや光っている。

質素なデザインのワンピースの下で、熟しきった、それでいて形のいい胸が見事にふくらんでいるのが、遠目にもよくわかった。

腰はきゅっと引き締まっておしりの肉付きもいい、実に見事な体型だ。

「あの人も、遊んでみたいなあ……」

とはいえ学生の身、今は学校があるから後回しだ。

慌てる必要は別はない。

そのための段取りなどを頭の中で考えながら、僕は朝からいい気分で学び舎に

向かった。

放課後、僕はいそいそと学校を後にした。

今日は保健室にいる優華や、部活中の理央と遊ぶのは見合わせておく。

荷物を家に置いて、学校にいる間に優華に用意させておいたささやかな手土産だけを持つと、今朝方にきれいな奥さんを見かけた家のインターホンを鳴らした。

「はい？」

ドアの向こうからは、女性の声が聞こえてきた。

「こんにちは。先日近くに引っ越してきました、獅童蓮斗と言います。これ、つまらないものですが……」

「あら、ご丁寧ありがとうございます。わざわざすみません」

にこやかに応じてくれる女性。

ドアが開いて、今朝見かけた奥さんが顔を出す。

その瞬間に、僕は意識を集中させて、『存在の根源の世界』に入っていった。



目の前に、ひとつの扉がある。

現在物質の世界で僕の前にいる、若い女性の存在につながる入口だ。

「そういえば、まだ名前も知らない人の存在に立ち入るのって、これが初めてかな？」

そう独り言ちると、扉を開けて中に入り、周囲を見渡した。

いかにも新婚の夫婦なんかが住んでいそうな、居心地の良さそうなリビングで、部屋の隅にはベッドなんかも置かれている。

(全体的に雰囲気明るいいし、概ね不満のない生活をしてるってところかな?)

あちこちにかけられたボードやソファの上で開かれた本、鏡台のメモ書き、ノートパソコンの画面なんかに、彼女の存在を定義する情報がたくさん書き連ねられている。

これまでの相手とは違ってまったく知らない女性なので、僕はそれらの情報にしっかり目を通していった。

「ふうん。名前は、坂島咲代子さんかあ……。旧姓は羽澄で、旦那さんは隆司さんね。なるほど」

年齢は25歳で、結婚してから何年にもならない。

夫との仲は良好だが、仕事が忙しくて彼が家を空けがちなのが少しだけ寂しい感じで、まだ子供はいない、と。

「そりゃあ、好都合だなあ」

僕はくすりと微笑くと、彼女の存在の根本にかかわる基本的な情報ばかりが書かれたボードの上に、新しい定義を加えていく。

どんな内容にするかは、基本、その時にどんな遊び方をしたいかという、その日の僕の気分だけの問題でしかないが……。

「坂島咲代子は、隣人である獅童蓮斗に絶対的な信頼を置いており、彼の言葉や彼のすることを決して疑わない」

「坂島咲代子は、獅童蓮斗が望むときに彼から種付けをしてもらえることになっている。この契約のことは秘密なので、誰にも口外しない」

「坂島咲代子は、獅童蓮斗から種付けをしてもらえることを大変感謝しており、お礼として彼からの求めにはなんでも応じる」

「まあ、こんなもんかな？」

僕は自分の書き込んだ内容をもう一度見返して満足すると、彼女の存在を後にして、物質の世界へ戻っていった。



「はいこれ、咲代子さんに」

物質の世界に戻ってきた僕は、にこやかに彼女に微笑みかけると、手土産の菓子折りを差し出した。

「まあ、わざわざありがとうございます」

咲代子は嬉しげに顔をほころばせると、僕からお菓子を受け取る。

まだ一度も伝えたことがないはずの自分の名前を僕が知っていることを、疑問に思った様子はない。

当たり前だ、彼女の中での僕は見ず知らずの相手ではなく、自分にとって絶対的に信頼のおける相手ということになっているのだから。

「ところで、咲代子さん」